
第40章 残ったホーム(1)

(朝日新聞特別報道部、プロメテウスの罫7、学研パブリッシング、東京、
2014、p.154-173)

2014年11月14日、災害医学抄読会

<http://plaza.umin.ac.jp/~GHDNet/circle/>

1. 要約

福島県飯舘村は原発事故後、放射能汚染に遭遇し、住民たちの殆どは「全村避難」で村外へと避難した。役場も福島市に移り、特例で開いている事業所もあるが、泊まることは許可されていない状況である。しかし、特別養護老人ホーム「いたてホーム」ではお年寄りたちが村を出ることなく暮らしている。そこへ看護、介護職員たちが避難先から通って勤務しているが、人手不足で職員の負担は大きく、また入居待機者の受け入れも十分にできない状況にある。ホームが残った理由には、避難先のお年寄りの体調が悪くなるのを防ぎたい、介護士の雇用を確保したいという理由だけでなく、事故後に家族が迎えに来ないという切実な現状が背景にあった。そんな現状において看護、介護職員達は必死で入居者達と向き合い、入居者達にとっては家族のような存在になっている。しかし、村を離れなければならない現状を受け入れられず、自ら命を絶つ人もいた。入居者達は家族の都合や国の都合で振り回される立場にあり、ホームはそんな人達を最期まで支える最後の砦となっている。

2. 考察

本論文では、家族介護の難しさを感じた。本当に見放したくて迎えに来なかったわけではないと思う。原発事故の影響で家族の生活は苦しい。さらに重介護の人を抱えて避難するとなると、面倒をみる場所も設備もない状況がほとんどである。このような状況では、実際十分に面倒をみていくことはかなり厳しいと思われる。そう考えると、ホームで面倒をみてもらう方がよいと考えるのも理解できる。また入居者自身に避難する体力があるかという点では、家族と避難したが体調を崩して帰ってきたという本文の一節にあるように、実際過酷な避難生活においては、必ずしも入居者にとって良いともいえないと感じた。終末期の人にとっては命にかかわることもある。しかし、そのような状況でも家族と過ごしたいと考える人もいるかもしれない。これはその人自身の生き方にかかわることであると思う。

現状では医療職員の努力によって、多くのお年寄りが支えられていることを強く実感した。また、その役割はますます大きくなっていると感じた。